

序文 なぜ、SDGsを問い直すのか？

今日、世界は、地球に生きる私たちは、気候変動、紛争、貧困や格差の深刻化等をはじめとするさまざまな危機に直面しており、大きな転換点にある。国連持続可能な開発目標（SDGs）は、こうした地球規模課題に国際社会全体として立ち向かうための行動計画、羅針盤である。SDGsは、人類共通の危機の克服を目指して2015年の国連総会で採択された、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」（以下、「2030アジェンダ」）の中核をなす。2019年12月に最初の症例が確認された新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックは、スペイン風邪（1918～1920年）以来の約100年ぶりの公衆衛生上の大規模な危機とされ、人間の生存を脅かす脅威となっている。COVID-19パンデミックは、保健医療分野はもとより持続可能な開発の三側面である経済、社会そして環境に多角的かつ複合的な影響を及ぼしている。新型コロナ禍（以下、コロナ禍）は、SDGsの達成を困難なものとし、そのインパクトは世界金融危機（2007～2010年、いわゆるリーマン・ショック）をはじめとするこれまでの危機を上回るとされる。同時に、コロナ禍は人間の安全保障の危機でもある、グローバル化の進展により、COVID-19は国家の枠組みを超えて人間一人ひとりに大きな脅威として降りかかり、「恐怖と欠乏」をもたらしている。新型コロナ危機は保健分野に限らず、世界中の経済・社会・環境に大きな影響を与え続けている。決して「コロナ禍は終わった」わけではなく、その影響は長期に及び、かつ世代を超えて連鎖すると危惧される。世界はポスト／ウィズ・コロナという新しい時代、新しい世界への模索を始めている。わが国においても、2023年5月8日以降COVID-19の感染法上の位置づけを2類から5類に引き下げることとなった。だが、ウイルスが消えたわけではない。私たちは、今後も感染症やさまざまな脅威に立ち向かう必要がある。コロナ禍は、新たな課題を生み出すとともに、社会の脆弱性及び既存の課題を浮き彫りにした。コロナ禍の教訓を踏まえて、人類共通の地球規模課題に対する新たな挑戦が始まっているのである。

本書の問題意識は次の通りである。私たちは、コロナ禍という人類史上の大

きな危機に直面し、SDGsの真価を問い直すべき時に来ている。これまでのSDGsの歩みを踏まえ、SDGsの採択、スタート時には予想だにできなかった、新型コロナ危機に直面し、これまでのSDGsを振り返り、これからのSDGsについて展望し未来の地球社会の持続可能な開発について深く考え直すべき時代と世界に私たちは生きている。おりしも本書が出版される2023年は、SDGsの15年間（2016～2030年）の道程の中間年にあたり、国連では総会の下にSDGサミットの開催、SDGsの中間レビューが予定されている。COVID-19パンデミックがもたらした新たな課題や顕在化させた課題は何か、どのような教訓を得て、SDGsを鍵に地球規模課題に取り組み「我々の世界を変革」していくのか。そして、新たな時代の人間の安全保障の実現に向けて、人類に降りかかる脅威に対して、保護とエンパワーメントそして「より大きな連帯」を通じてどのように対応していくのか。本書ではこうした問いを設定し、多角的・複合的に論じるため、各分野の第一線において研究・実践等で活躍の先生方にご執筆の労をお取りいただいた。新型コロナ危機を契機に、SDGsの真価を問い直し、人間の安全保障を踏まえてポスト／ウィズ・コロナの新たな世界や時代を展望する、最先端の野心的な研究として、本書の刊行を企画した。

本書の特色は以下の通りである。第1に、本書はSDGsを問い直すチャレンジな学術書である。コロナ禍をきっかけに、SDGsにおいてこれまで十分論じられてこなかった点や、SDGsへの批判的な観点、研究の深化が期待される点等も含めて、分析を行い今後の展望を論じている。本書の理解を深める上で、本書の執筆者等によるSDGsの概説・入門の良書として、高柳彰夫・大橋正明編（2018）『SDGsを学ぶ——国際開発・国際協力入門』法律文化社、および蟹江憲史（2020）『SDGs（持続可能な開発目標）』中公新書を挙げさせていただく。各章の執筆者がSDGsに関する優れた業績を出版されており、併せてご参照いただきたい。第2に、本書はコロナ禍、SDGsや人間の安全保障に関する最新のトピックや課題を扱っているが、時事的な分析にとどまらない、普遍的で長期的な展望をもつ研究である。SDGsが取り組む地球規模課題は、その目標年である2030年で終わるわけではなく、人類が永続的・普遍的に取り組み、克服すべきものである。また、人間の安全保障において特に重視される非日常的で突発的な大きな脅威は、コロナ禍に限ったものではない。グローバル化が進展する中で、未知の新興感染症をはじめ、今後も人間一人ひとりにさまざま

な脅威が降りかかってくることは不可避であろう。第3に、本書は最先端の研究を目指しつつも、SDGsに関心のある幅広い読者を対象としている点も特色といえる。大学等での教科書としての利用そして、行政、企業、NGO/NPOや地域社会等の多様なステークホルダーの方々にも研究、学習や実践等でご活用いただけるよう、さまざまな工夫を行っている。

本書の構成は次の通りである。本書にはSDGsの17目標に因んで、17本の論稿（序文および第1章～第16章）が収められている。本書においては、「SDGsを問い直す」というテーマを、人間の安全保障の危機であるコロナ禍を踏まえて多角的・複合的に論じるため、次の2部から成る。第1章の総論に続き、第1部では、「新型コロナ危機で『取り残される人々』とSDGs、レジリエンス」をテーマに、貧困層、難民、移民・外国人労働者、災害弱者、女性・女子、高齢者そして障害者に焦点をあてて分析している。「2030アジェンダ」・SDGsの基本理念である「誰一人取り残さない」(no one left behind)の観点から、脆弱な人々に着目し、コロナ禍によって浮き彫りとなった課題や新たに生じた課題について論じている。と同時にこうした「取り残される人々」こそが、開発アクターとしても重要であり、レジリエンス（強靱性・回復力）を備えている点にも注目している。第2部では、「ポスト／ウィズ・コロナとSDGs」をテーマに、持続可能な開発に不可欠な三側面である経済・社会・環境について、SDGsの柱である「5つのP」から問い直し、ポスト／ウィズ・コロナの地球社会を展望している。すなわち、People（人間：グローバル・ヘルス、教育）、Prosperity（繁栄：資本主義経済）、Planet（環境）、Peace（平和）、Partnership（パートナーシップ：開発協力（ODA）、グローバル・ガバナンス、非政府組織（NGO）・市民社会）である。

次に、本書では、幅広い読者の理解を促進するため、以下の編集上の工夫を行っている。第1に、各章の主な論点がわかりやすくなるように副題をつけている。同様に各章内の「はじめに」には問題提起となる副題を、「まとめと展望」には、主なメッセージと今後の展望を示す副題をつけている。これにより、本書全体の内容は目次から概観できるよう工夫している。第2に、主要略語一覧を作成し、全体のキーワードを一定程度網羅できるようにしている。また、各章の冒頭にキーワードおよび要旨を配置した。これらも各章の内容を理解する上で有益であろう。なお、総論にあたる第1章のキーワードは本書全体

の共通のキーワードとなっている。第3に、専門用語等につき、難解と思われるもの、分野外・専門外の読者にはなじみが薄いと思われるもの等については、可能な限り章末注でわかりやすく解説している。第4に、参考文献については、各章の執筆にあたり膨大な文献を参照いただいているが、読者の便に鑑み中でも特に重要なものを厳選の上、掲載している。第5に、本書のカバー装丁は、さまざまなSDGsへの取組みを通じたコロナ危機の克服をイメージしている。

なお、「SDGsを問い直す」上で必須のSDGsの17目標については、編著者が英語の原文から新たに訳出し、原則として本書全体をこれに統一している。その際、先行の訳文等も参考にしつつ、よりわかりやすい文章となるよう工夫した。周知の通り、SDGsは目標、ターゲット、グローバル指標の三層構造となっているが、本書の執筆者はSDGsの専門家であることを尊重し、ターゲットおよび指標の訳語と略称については、各章に委ねている。同様に、目標およびその略称についても各執筆者を尊重し、本書で統一した訳語と併記している箇所もある点、ご了解いただきたい。

最後に、本書の出版にあたり、多大なお力添えをいただいた諸氏に謝辞を記すことを許されたい。各章の執筆にあたり、本書のテーマについて各分野の第一線でご活躍の先生方21名（編著者を除く）に、ご尽力をいただいた。深く御礼申し上げる。本来、執筆者一人ひとりにお礼を申し上げるべきところ、ここでは本書の構想等にあたり特にご厚誼を賜った次の先生方に謝意を示す点、ご了承いただきたい。

国際開発学会における共同研究として、「持続可能な開発とSDGs」研究部会にて副代表としてご協力いただいた蟹江憲史教授、北村友人教授（編著者が代表）、同「開発のレジリエンスとSDGs」研究部会にて代表としてご尽力いただいた関谷雄一教授（編著者が副代表）、そして両研究部会のメンバーであり科研費等のプロジェクトで協働させていただいた大門（佐藤）毅教授に心から御礼を申し上げます。また、東京大学大学院総合文化研究科にてSDGs and Human Securityをテーマに研究・教育の機会やご助言等をいただいた佐藤安信教授、同大学院医学系研究科国際地域保健学教室にて客員研究員としてグローバル・ヘルスについて研究の機会やご助言等をいただいた神馬征峰教授、そして母校名古屋大学大学院国際開発研究科にてご学恩を賜った伊東早苗教授に改

めて感謝したい。最後に、わが国の国際開発研究の泰斗として偉大な足跡を残された、編著者の生涯の恩師である、故西川潤早稲田大学名誉教授（1936～2018年）に深い敬意と感謝の念を示させていただきたい。最後の単著となった『2030年未来への選択』（日本経済新聞出版、2018年）は、SDGsを未来論から論じた珠玉の名著である。

本書の企画にあたっては、法律文化社の舟木和久氏より国際開発学会全国大会にてご提案をいただき、出版にいたるまで、あたたかくそして粘り強く多大なるご支援を賜った。重ねて御礼申し上げます。

2023年3月

編著者 野田真里